重要他者に対する愛着が恋愛の欺瞞場面に及ぼす緩和効果

—欺瞞エピソード刺激文の人称形式による違い—

○亀井隆幸¹・八木保樹²

(¹立命館大学大学院文学研究科・²立命館大学)

キーワード：愛着，プライミング，欺瞞

Buffer Effects of Attachment to Significant Others When Responding to Deception in Romantic Relationships

Takayuki KAMEI¹ and Yagi YASUKI²

(¹Graduate School of Letters, Ritsumeikan Univ., ²Ritsumeikan Univ.)

Key Words: Attachment, Priming, Deception

目 的

Mikulincer & Shaver (2007) が愛着理論の観点から説明している、重要他者との関係での安全感・安心感を高める実験的なプライミング操作（安全感のプライミング）を援用し、自己脅威の一種である恋愛の欺瞞場面に対する緩和効果（寛容な反応を促進するか否か）を検討した。現在までにこの効果を支持した亀井・八木（2010）の実験は、場面想定課題の手続きを利用して、仮想の恋愛の欺瞞場面に対する参加者自身の反応を測定した。しかし、その際の欺瞞エピソード刺激文は、三人称形式（他者に起こった出来事としての形式）で提示されたのみであり、そこで見られた参加者の反応は、自己脅威としての恋愛の欺瞞場面に対する反応とは異なるものであると批判することも可能かもしれない。そのため、本研究では、仮想の恋愛の欺瞞場面を二人称形式（自分自身に起こった出来事としての形式）で読んでもらう条件を追加して、亀井・八木（2010）で支持された効果が得られるか否かを確認することを目的とした。

方 法

実験参加者 大学生 51 名（男性 26 名，女性 25 名，平均年齢 20.65 歳， $SD=2.14$ ）であった。

実験計画 プライミング条件（2：重要他者，中性）および人称条件（2：二人称，三人称）による 2 要因被験者間計画であった。

手続き 質問紙形式で実験を実施した。最初に、プライミング操作を行った。プライミング条件は、参加者ごとに無作為に割り当てた。重要他者条件では、困難な問題に直面した際に頼りにできる重要他者と、その人物との関係で実際にあったポジティブな愛着経験を回想させる質問に回答してもらった。中性条件では、最近の生活態度についての簡単な質問に回答してもらった。

プライミング操作の後、村井（2005）の欺瞞性認知課題を一部改変した場面想定課題を実施した。そこではまず、仮想の恋愛の欺瞞場面を読んでもらった。第 1 場面は、昨夜の電話に出なかった理由を聞かれたパートナーが説明を行う状況であった。パートナーの嘘の発言内容を提示し、発言の嘘らしさについて 7 件法で評定してもらった（欺瞞度評価、例：うそっぽい一本当っぽい）。この時点では、パートナーの発言内容が嘘であることは明示しなかった。評定後、第 2 場面を提示した。場面の内容は、嘘が発覚した後でパートナーが謝罪を行う状況であった。パートナーの謝罪の発言内容を提示して、許し難さ、腹立たしさなどについて 7 件法で評定してもらった（不寛容度、例：相手を許せないような—相手を許せるような）。以上の欺瞞場面を提示するにあたっては、人称条件ごとに主語の異なる刺激文を用いた。二人称条件の刺激文では、主人公は“あなた”，パートナーは“A さん”であった。三人称条件の刺激文では、参加者の性別に応じて、主人

公に同性，パートナーに異性の人物名（“淳也さん”“真由美さん”）が付けられていた。この人称条件については、参加者ごとに無作為に割り当てた。

結 果

プライミング条件と人称条件の操作については、操作チェックを行い、有効性を確認した。欺瞞度評価と不寛容度については、各個に尺度得点（1—7）を算出し、各得点の低さを寛容な反応の指標とした。その上で、各得点に対し、プライミング条件と人称条件による 2 要因分散分析を行った。

分散分析の結果、欺瞞度評価に対しては、プライミング条件と人称条件の主効果および交互作用は有意ではなかった。不寛容度に対しては、プライミング条件の主効果が有意であった（ $F(1,47)=5.26, p=.03, \eta^2=.10$ ）。すなわち、重要他者条件では、中性条件と比べて有意に不寛容度が低かった（重要他者： $M=4.69, SE=0.28$ ，中性： $M=5.49, SE=0.19$ ）。一方で、人称条件による主効果、およびプライミング条件との交互作用は有意ではなかった。

考 察

今回の実験の結果、安全感のプライミングは、嘘発覚前の欺瞞度評価には影響せず、嘘発覚後の不寛容度を低下させる効果を示した。これは、亀井・八木（2010）と同じく、安全感のプライミングによる緩和効果が、恋愛の欺瞞場面に対して有効であることを示すものである。加えて、この緩和効果は、欺瞞エピソード刺激文の形式（二人称か三人称か）に影響されず、前回の結果が、三人称形式による自己脅威刺激としての弱さによってもたらされたものではないことが示唆された。

重要他者との関係で安全感が得られた経験があれば、それが一種の心理的資源、いわば“財産”となり、その後の人間関係において、脅威に直面しても、安全感を獲得、維持することに拘泥せずともよい。例えば、パートナーに嘘を言われる出来事が自分自身に起こっても、より寛容に反応できる。ただし、欺瞞度評価において中性条件と差がなかったことから、ここでの寛容さは、嘘が言われている事実を見逃すといった“騙され易さ”を意味するものではないと考えられる。

引用文献

- 亀井隆幸・八木保樹（2010）. 重要他者に対する肯定的感情が恋愛における欺瞞場面の認知に及ぼす影響 日本心理学会大会発表論文集
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2007). Boosting attachment security to promote mental health, prosocial values, and inter-group tolerance. *Psychological Inquiry*, 18, 139-156.
- 村井潤一郎（2005）. 発言内容の欺瞞性認知を規定する諸要因 北大路書房